
狭間の剣士と魔女

二葉亭燿夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狭間の剣士と魔女

【Nコード】

N0426N

【作者名】

二葉亭耀夜

【あらすじ】

聖杯戦争のために遠坂凜が呼び出したサーヴァントは・・・
狭間を歩き、戦い続けた狂戦士と魔女は異なる世界で何を成せるのか。

Fate/stay night 風 ステータス

【クラス】

ベルセルク

【真名】

ガッツ／シールケ

【性別】

女性

【属性】

混沌・善

基本能力

【筋力】 A＋(SS)

素晴らしい筋力だが女性としてどうだろう。

【魔力】 B＋(E)

戦士ベースの肉体のためシールケ由来の魔力は低下。

【耐久】 A(SS)

凄まじい耐久力を誇るが人間としてどうだろう。

【幸運】 D＋

正直、お世辞にも運が良いとは言えない。

【敏捷】 B＋(A＋)

「獣の如く」とは良く言ったものだが、獣が限界。

【宝具】 EX

扱い辛さもEX。

クラス別保有スキル

【対魔力】C+

シングルアクションの魔術を無効にする程度。

単独保有スキル

【剣術】A

使徒との闘争を続けて完成された極めて強力な剣術。
対象が魔の場合、ランクが1上がる。

【魔術】A+

シールケが身に付けていた異界の魔術を行使出来る。
キャスターの魔術に劣らぬ威力を出せるが、発動にとても時間がかかる。

【怪力】S

物理法則を無視する程の驚異的膂力を有する。

【心眼・真】A

極限の戦いの末に身に付けた戦闘経験により、戦闘を有利に進める。

【戦闘続行】A

たとえ瀕死の重傷でも戦闘能力が低下しない。

【神殺し】A

幻想種などの本来触れ得ないモノの殺害可能とする。
神性を持つ相手に対して攻撃ランクが1上がる。

【うっかり】C

自信の命が関わっていない場面では、時々大失敗をしてしまう。

宝具

- - - - -

【狂戦士の鎧・狼】EX レンジ：対人

鎧の力が解放され圧倒的な戦闘力を得る。発動時の能力は（）内。
正気を失っているため魔術は使用不可能になる。

【狂戦士の鎧・骸】EX レンジ：対人

魔術で補助する事で鎧の力を解放し圧倒的な戦闘力を得る。

発動時に魔術以外の全ての能力が1ランク上がる。

正気を保っているため、魔術の使用は可能。

F a t e / s t a y n i g h t 風 ステータス（後書き）

書き始めた段階で決めていたステータスです。

F a t e と ク ロ ス さ せ る な ら 一 応 作 っ て お か ね ば ！

と思い作成。

ブローグ

壊れかけの扉を蹴り飛ばし、居間の内部へ入った私を迎えたのは…

「……………」

「貴女、誰？」

やたら背の高い二十代半ば程の女性がそこにいた。

黒い全身鎧に同色の外套、長い黒髪と黒づくめかと思いきや、前髪に一房だけ白髪が混じっている。

何より目に付くのは、その背中に吊された巨大で無骨な鉄の塊。

剣というにはあまりに巨大な、それでも剣としか呼べない代物、それが彼女の正体を端的に現している。

「手荒い召喚の直後に、その言い分は無いかと」

「うつ……。ってことは、貴女が私のサーヴァントで良いのかしら？」

直ぐにでも戦闘を始められる様な服装に反して、なんだか非常に穏やかな表情で窘められた。

彼女は自らの身体を確かめる様に動かし終わると、納得したように深く頷いた。

「アナタとの間にパスを感じます。アナタのサーヴァントで間違い無いようですね」

「そう、良かったわ。触媒無しで儀式に挑んだから、失敗したかと思っただわ」

居間が半壊してしまったが、召喚自体は成功したし、彼女はどうみ

でも『剣士^{セイバー}』。

七騎中最良のサーヴァントと云われるセイバーを、触媒無しで呼び出したのだ。居間の惨状位には目を瞑っても良いだろう。

「一応確認しておくけど、アナタのクラスはセイバーで良いのかしら？」

「いいえ、私のクラスは正規のものでは無いようです。」

「えっ、イレギュラーなクラスっ!？」

世の中、そんなに甘くなかったか……。しかも、正規じゃないクラスって何よ？

「ちなみに何のクラスなの？」

「ベルセルクです」

「ベルセルクって確か……」

確か、獣の毛皮に身を包んで、自らをトランス状態にして戦う戦士。ということとは狂戦士か……。思わず頭を抱えてしまった私を、誰が責めれよう？

「それってバーサーカーとは、どう違うの？」

「意思疎通が可能です」

「あ、確かにそうだね。バーサーカーは意思疎通出来ないって聞いてたし……」

バーサーカーはクラス補正で最強の力を得る代わりに、意思疎通不可・戦闘技術の喪失・魔力消費過多の三重苦で、マスターは自滅一直線のクラス。

それに引き換えベルセルクは、意思疎通が出来る。つまり戦闘技術も多分大丈夫、魔力消費も問題無し……

アレ？

これは、それほど悪くないカードを引いたんじゃない？

実力の程は分からないけど、いきなりバーサーカーを引き当てるのに比べれば遙かにマシではなからうか…

「えっと、じゃあ狂化しないバーサーカーって認識で大丈夫？」

「狂化はしますよ？」

「やっぱりバーサーカーじゃないっ！」

こちらの問いに不思議そうに答える女性。

デカい図体でちょこんと小首を傾けても、台詞の内容が可愛く無いから！

「適性としてはバーサーカーがキャスターなんですけど、既に埋まっていたし、セイバーも弾かれてしまいました」

「そのなりでキャスターって…、どうみても戦士だけど？」

「古い説話・伝承には良くある話ですよ、集団の中で登場人物が増えたり減ったりするのは」

「ん？じゃあ、アナタは登場人物が減った際に、個性が統合された人物ってどこかしら？」

「理解が早くて何よりです。狂戦士とそれを支える魔女が統合され魔道の業を知る女狂戦士の英霊となったのです」

かなり面白い話であるが、言われてみれば確かにあり得る事かもしれない。

日本にだって巖流島の佐々木小次郎の様に、今では存在自体が捏造とされる人物さえいるのだから。

「クラスについては良いわ。真名は何ていうの？」

「生前の名はガッツとシールケです。英霊としての名は『狭間の森

の狂戦士』、または『狂神の魔女』です」

ドウルガー

狭間の森？ドウルガー？

駄目だわ、全然知らない…

「えっと、どこの英霊？どれも聞いた事の無い名前なんだけど」

「召喚時に何らかの問題が発生したのか、記憶に欠落が見られます。出自に関する記憶は曖昧です」

「問題って・・・ッ！？」

「どうかしましたか？」

問題とやらについて言及しようとしたんだけど、視界の隅に映った時計を凝視して固まってしまう私。

そんな・・・まさか・・・、私とした事がこんな重要な場面で『うつかり』をしてしまうなんて・・・

「ごめん・・・、原因・・・私のせいかも・・・」

「どういことですか？その時計に原因が？」

視線から私の凝視しているものが分かったのだろっ、同じ様に時計を見ながら疑問の声を掛けてくる。

「私、普段余裕を持って行動するために、家中の時計を30分進めて生活してたんだけど・・・」

「なるほど、召喚の儀式も30分余裕を持って行ってしまったと」
「・・・はい」

は、恥ずかしい・・・。

召喚を万全の状態で行うために、自分の魔力が最も充実する時間で儀式に望んだ『つもり』だったのに・・・。

見た目ではピンとこないけど、話からすると英霊にまで成った魔女に、こんな未熟な姿を晒してしまうなんてゝ！！
辛辣な言葉を覚悟していた私だけど、彼女は何故かしきりに頷いている。

「なるほど、自身の命が直接関わらない大舞台では、得てして『うつかり』ミスをしてしまうものですね」

「そ．．．そうかしら？」

「ええ、私も『うつかり』村一つを水で流してしまった事もあります」

うつかりで村一つって．．．深く考えるのはよそう。

「とりあえず、この部屋の惨状をどうにかしましょう」

「そうね」

彼女の意見に賛成し、魔術で大まかな修復を始めた。

ベルセルクに名前を教えていない事に気が付くのが、居間の片付けがあらかた終わって寝室に移る時まで掛かったのは、サーヴァント召喚で疲れていた事と、彼女が何も言ってこなかったからだと思いたい。

断じて『うつかり』では無いと信じたい。

プロローグ（後書き）

実は一人称の彼女が最後まで名乗っていない話w

- - - - -

ベルセルクのガッツとシールケって、英霊になったら絶対「シールケ IN ガッツ」状態で後世伝わっているんじゃないかな。

と、妄想を膨らませて出来た話です。

「登場人物が統合されて」のくだりは完全に捏造です。
でも個人的には有り得るんじゃないかなとw

ちなみに作者は百合好きなので、ベルセルクとシロウとのカップリングは無いと思います、と宣誓しておきますw
むしろ、アインツベルンやマキリの娘さん達と仲良くさせたいですね。

さて、わざわざ最後まで読んで頂き、ありがとうございます。
続きも頑張っていきたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0426n/>

狭間の剣士と魔女

2010年10月10日17時54分発行